

# (20) フキ

## 主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
ウイルス病 (ButMV、AMV、 CMV、ArMV)、 アブラムシ類 媒介	①ウイルスに感染していない種茎を用いる。 ②テントウムシやヒラタアブなどの捕食性天敵の発生が多いときには、殺虫剤の散布は控える。  【参考事項】 アブラムシ類は出芽期に発生が多い。フキモザイクウイルス (ButMV)、アルファルファモザイクウイルス (AMV)、キュウリモザイクウイルス (CMV) はアブラムシで伝搬されるウイルスであるが、フキでのアブラムシ伝搬はButMVとCMVで確認されているものの、AMVは不明である。アラビシモザイクウイルス (ArMV) は線虫伝搬ウイルスであるが、フキでは不明である。	①ウイルスを伝搬 (媒介) するアブラムシ類の防除を行う。 (例) アセタミプリドくん煙剤 (モスピランジェット) イミダクロプリド水和剤 (アドマイヤーフロアブル) カルタップ水溶剤 (パダンSG水溶剤) ジノテフラン粒剤 (アルバリン粒剤、スタークル粒剤)
半身萎凋病 ( <i>Verticillium</i> )	①無病株を選んで発病のおそれのないほ場で栽培する。 ②連作を避ける。水田との輪作は発病抑制に効果がある。 ③夏季に太陽熱土壌消毒を行う。 ④被害株、被害茎葉は除去して、適切に処分する。 ⑤窒素過多にならないようにするとともに、カリ質肥料をやや多く施用する。 ⑥種茎掘上げ後の水洗は、流水中で行う。  【参考事項】 本病菌はナス、イチゴ、トマト、ハクサイ、ダイコン、カブ、オクラ、ウド、キクなどを侵す (ただし、寄生性の分化あり)。 地温が20～25℃で最もよく発生する。 罹病茎葉内で微小菌核が形成され、これが土壌中に長期間残存する。	土壌消毒を行う (土壌病害虫の防除法の項参照)。 (例) クロルピクリンくん蒸剤 (クロールピクリンなど) ダズメット粉粒剤 (ガスタード微粒剤、バスアミド微粒剤) メチルイソチオシアネート・D-D油剤 (ディ・トラペックス油剤)
白絹病 ( <i>Sclerotium</i> )	①夏季に太陽熱土壌消毒を行う。 ②発病株を早期に発見し除去する。 ③種茎は健全親株から採取する。 ④窒素肥料の過用を避ける。 ⑤密植を避け、株元が過湿にならないようにする。  【参考事項】 3月下旬～10月にかけての高温多湿になる環境条件下で発生が多くなる。 発病適温は15～35℃である。 主に、土壌伝染、種茎伝染する。	①定植前に土壌混和する。 (例) トルクロホスメチル粉剤 (リゾレックス粉剤) ②植付時に種茎浸漬する。 (例) バリダマイシン液剤 (バリダシン液剤5) ③植付時に種茎粉衣する。 (例) トルクロホスメチル粉剤 (リゾレックス粉剤) ④定植時に土壌灌注する。 (例) メプロニル水和剤 (バシタック水和剤75) ⑤定植後に灌注する。 (例) トルクロホスメチル水和剤 (リゾレックス水和剤) バリダマイシン液剤 (バリダシン液剤5)
葉枯病 ( <i>Stagonospora</i> )	①窒素過多を避ける。 ②施設栽培では多湿にならないように注意する。 ③株養成期間中に多発した株は苗として用いない。  【参考事項】 病斑部に形成された柄子殻で越冬し、分生子により空気伝染する。	①発生初期から農薬を散布する。 (例) ベノミル水和剤 (ベンレート水和剤)
さび病 ( <i>Coleosporium, Puccinia</i> )	①発生初期に被害茎葉を除去する。 ②施設栽培では多湿にならないように注意する。	①発生初期から農薬を散布する。 (例) 炭酸水素カリウム水溶剤 (カリグリーン) 炭酸水素ナトリウム水溶剤 (ハーモメイト水溶剤)
コナジラミ類	①ほ場周辺の雑草を除去し、飛来源、増殖源とならないようにする。 ②施設の開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットを張り、侵入を防ぐ。	①発生初期から農薬を散布する。 (例) アセタミプリド水溶剤 (モスピラン顆粒水溶剤) イミダクロプリド水和剤 (アドマイヤーフロアブル) エトフェンプロックス乳剤 (トレボン乳剤) ジノテフラン水溶剤 (アルバリン顆粒水溶剤、スタークル顆粒水溶剤) ピリダベン水和剤 (サンマイトフロアブル) プロフェジン水和剤 (アブロード水和剤) (タバココナジラミ類幼虫 (シルバリーフコナジラミ幼虫を含む))

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
コナジラミ類 つづき	<b>【参考事項】</b> オンシツコナジラミとタバココナジラミ（バイオタイプB及びバイオタイプQ）が寄生するが、タバココナジラミの発生が多い。特にタバココナジラミ（バイオタイプB）が寄生すると、白化症の原因となる。	
フキノメイガ	①被害茎を早めに刈り取って適切に処分する。 ②施設内への侵入防止のため、防虫ネットを張る。 <b>【参考事項】</b> 幼虫が地下茎に食入すると防除が困難になる。	①幼虫ふ化期～食入開始期に散布する。 (例) エトフェンブロックス乳剤（アースガーデンT、トレボン乳剤） カルタップ水溶剤（パダンSG水溶剤）
ハスモンヨトウ	①ほ場周辺を除草する。 ②卵塊や幼虫は発見しだい捕殺する。 <b>【参考事項】</b> アブラナ科、ナス科、キク科など多くの植物を食害し、施設外から成虫が飛来するので注意する。卵からふ化したばかりの幼虫は集団で葉を食害するため、葉は白色に透けたような被害となる。	①発生初期に散布する。 (例) クロラントラニリプロール水和剤（プレバソンフロアブル5） クロルフェナピル水和剤（コテツフロアブル） ノバルロン乳剤（カウンター乳剤） メトキシフェノジド水和剤（ファルコンフロアブル） ②微生物農薬を利用する（微生物農薬の項参照）。 (例) BT水和剤（バシレックス水和剤など）
センチュウ類 (ネコブセンチュウ、ネグサレセンチュウ)	①対抗植物と輪作するか前作に対抗植物を栽培する。 ネコブセンチュウにはギニアグラス、クロタラリア スペクタビリス、マリーゴールドなどが有効 ネグサレセンチュウにはハブソウ、マリーゴールド、ルドベキアなどが有効 ②太陽熱消毒を行う（土壌病害虫の防除法の項参照）。 ③有機物を施用する。 <b>【参考事項】</b> フキではネグサレセンチュウによる被害が大きい。 対抗植物を栽培する場合は根量を十分確保することが効果を高めるポイントであるので、十分な栽培期間を確保する。また、対抗植物は品種・系統により効果に大きな差があるので、効果の高い品種を選定する。 有機物を施用すると、土壌中の生物相が豊かになり、センチュウ類の天敵も増加するため、相対的に有害土壌線虫の密度が減少する。	①定植前に土壌くん蒸する。 (例) メチルイソチオシアネート・D-D油剤（ディ・トラベックス油剤）